



昨日の自分にやみくもなうらやま

高校受験が終わって三ヶ月が過ぎました。受験を経験したみなさんの先輩である去年の三年生はどうしているのだろうかと考えることがあります。合格した人はそれに満足してしまい学ぶことを止めていないか、また、残念な結果になってしまった人は、いつまでもそのことを引きずり学ぶことを止めてはいないかと。



「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という諺があります。これは、熱いものも飲みこんでしまえばその熱さを忘れてしまうことから、経験も過ぎ去ってしまえばその苦しさを忘れてしまうという意味で使われます。中学三年生においては「喉元」とは「入試」を、「熱さ」とはそのときの「勉強熱」を指すことになるでしょう。私はよい意味で忘れてほしいと思っています。

というのは、合格した三年生においては、いつまでもその結果に満足することのないように、また残念な結果になってしまった三年生においては、そのことを引きずらないように、どちらとも新たなスタートを切ってほしいと思っっているからです。過去をズルズル引きずって過ごす姿に成長の跡を少しも見ることができません。過ぎてしまった過去はどのようにもなりません。これからのことは自分の心がけ次第でどうにでもなります。私はたとえその成長がわずかなものであったとしても、今日の自分が昨日の自分より成長した自分でありたいと思っていますし、皆さんにもそうあってほしいと思っています。たとえ昨日までやる気がなく

ダラダラと過ごしたとしても、気持ちを入れ替えて今日からはじめることができます。昨日の自分に別れをつけて新しいスタートを切ってみてはいかがでしょうか。新しく一歩踏み出した皆さんをいつでも待っています。

最後に余談になりますが、この「喉元過ぎれば……」ですが、表現の仕方は違えども、人間思うところは同じようで、違う国の言葉でも同じような意味のものを見つかることができます。英語では、「航海中の嵐では、誰もが心から救われることを祈るのに、いったん陸に上がってしまえば、祈りをすっかり忘れてしまう」という表現があります。また韓国語では「○○○に行くときと帰ってくるときでは気持ちが違う」なんておもしろい表現があるそうです。どんな言葉が当てはまると思いますか。ヒント○・緊急のときには、特にそのときの前後で全然違います。ヒント○・神様がいると歌われた所です。はたしてその答えは。

(小池)

夏休みの自由研究

小学生の頃から、夏休みの宿題はとても嫌いでした。読むだけで夏休みが終わってしまう読書感想文や、自由すぎて何をどうやっていいのかわからない自由研究、特に書くような出来事が起こらないのに毎日書かなくてはならない夏休み日記など。夏休みに入ると現実逃避して遊びまくり、最後の残り一週間になると毎年、母親からの強烈な雷と宿題を終わらせるための監視付き宿題特訓が行われるのが、夏休みの恒例行事でした。



そんな小学生時代を過ごした私も中学に入り、そんなことの繰り返しは流石に格好悪いなあと感

じ、多少は計画的に夏休みの宿題をやるようにはなりましたが、自由研究だけは嫌で後回しにしていました。残り一週間を切った頃、やっとりかかるのですが、私の中学生時代はまだパソコンも無く、参考にできるものは図書館や本屋さんの自由研究関連の本だけです。しかしどの本に載っているのも、手間や費用がかかり大変で、一週間に上かかるような実験ばかりで、時間のない私には参考になりません。やることが思いつかず、残り時間も少なかった私の前で、母親が台所で新聞紙を持って床を叩きまくっています。そう、ゴキブリと格闘しているのです。戦いを終え、達成感を得ている母親を見て思いました。「昼間ほとんど見かけないけど、昼間ゴキブリはどこにいるのだろう。」



「なんで台所にばかり現れるのだろう。」そんな疑問が湧き、何故か私は「そうだ！自由研究のネタにして調べてみよう！」と勝手にしまったのです。そこから私は、ゴキブリの生態を調べるために、様々な仮説を立てて、検証しました。例えば、ゴキブリの好む水分として、水・醤油等の複数の液体を入れた器をそつと寝る前に台所に並べて、朝方確認していくと、特定の液体の中で溺れていることや、昼間の隠れ家として、暗いところだけでなく、狭くて暗くて「暖かい場所」を好んで隠れていること等。中学生としては結構なレベルの研究ができたと思います。その内容をレポート用紙(四〜五枚程度)にまとめて、夏休み明けに提出しました。親にばれないようにやるのが大変でしたが、とても達成感のある自由研究でした。

秋になり、中学校の文化祭で、自由研究で優秀な作品を展示する展示室ができると聞きました。一抹の不安はありましたが、こんな下品な研究が選ばれるはずがないと思っていましたが……。選

ばれてしまいました。しかも全学年で最優秀賞です。壁に最優秀賞専用のエリアまで作っていたので、そこに丁寧に全て貼り付けてあります。母親が必ず来る文化祭です。もう逃げようがありません。当日、文化祭に来た母親は、中学校では笑顔でしたが、家に帰った後は豹変して大激怒です。正座させられ、長時間説教です。「うちに沢山ゴキブリがいますって言うっているようなもんでしよう！恥ずかしいじゃない！」等々。怒られはしましたが、初めて夏休みの自由研究で得た達成感はまだ忘れられません。ちよつとしたヒラメキも必要かもしれませんが、皆さんも夏休みの自由研究は是非前向きに取り組んでみてください。一生忘れられない思い出ができるかもしれません。ただし、場合によっては、親の了承が必要ですが……。



(長坂)

あなたは「普通」の人間ですか？

●今、「アルジャーノンに花束を」というドラマが放映されている。知的障がいをもった主人公が障がいを治す(お利口になる)ための手術を大学教授から勧められ、成功し、天才的な知能を手に入れる。しかし、そこには多くの試練が待ち受けており、最後には……(詳しくは是非ドラマや本をご覧ください)という話である。私は小学生のころ、この原作を読んだ。小学生ながらに、泣いた記憶がある。というのも、私自身、身近に障がい者がいるからだ。

●さて、「障がい者」といったらみなさんはどんな人達を想像するだろうか？五体不満足の人？それとも、自分たちとは違う、普通じゃない人？

●こんな話を聞いたことがある。「もし、目の見え

ない人が多数を占める国があったとする。その国では、『街灯』というものが不要ない。目が見えないことが『普通』なのだから。そんな世界に目が見える人がいたらどうするだろう。その人は必死になって国に『どうか、町に街灯をつくってください。夜、何も見えなくて道を歩けません。』と訴える。しかし、国は『そんなものは不要ない。みんな目が見えないのだから。』と聞く耳を持たない。この国では、目が見える人が『障がい者』になるのだ。

●この話を聞いたとき、私は衝撃を受けた。そんなことを考えたこともなかった、というのがあるが、それ以上に普段私たちがさりげなく使っている「普通」という言葉は、何だろうか。

●私たちは、多数派のことを「普通」と言い、少数派のことを「普通でない」と言つて勝手に区別している。普通だから仲間に入れてあげる、普通じゃないから気持ち悪い、怖い……。しかし、それでいいのだろうか。

●あなたの周りの人たちが頭に浮かべてみよう。みんな同じ人？みんなが全く同じ洋服を着て、同じ行動をして、同じ趣味で、同じ食べ物が好きだったら、それこそ気持ち悪い。頭はいいけど運動が全くできない、イケメンだけどすぐく音痴、というように、世の中いろんな人がいる。人間、欠陥だらけ。完璧な人なんていない。人には、その人特有の個性がある。それと同じで、障がいだつて一つの個性である。皆さんが今後の生活を送る上で、様々な障がいをもった人と出会うことがあるだろう。どうか、障がいのある人を温かく見守ってほしいと思う。

●そして、忘れないでほしいのは、どんな人間であつても、必要とされない人はいないということである。嫌なことがあつたつて、必ず味方をしてくれる人がいる。まだ自分の居場所を見つけれ

ていない人もいるかもしれないが、それぞれの場所に必ず居場所はある。だから、自分はどうでもいいと悲観せず、どんなことがあつてもあきらめず、協力し、励まし合い、お互いに相手を思いやった生き方をしてほしい。そして、周りの人から愛される人間になってほしい。「アルジャーノンに花束を」の主人公のように。



(池田)

あした死ぬかもよ?

つい先日(五月三〇日)午後八時二四分、小笠原沖で発生したマグニチュード八・五の巨大地震。二〇一一年の東日本大震災以来となるマグニチュード八を超えたこの地震で、中三の授業を行つていた江戸川台教室の建物も大きく揺れた。地震が続いていたこともあり生徒の中には「日本はもう終わりだ……。」と、この先を案じる子もいた。確かに日本、この地球が終わりを迎える日は来るのだろう。それは私たちの生が尽きたはずと後のことかもしれないし、いや、明日かもしれないし数秒後かもしれない。同時に私たちの生もまた、確実に死へ向かっている。

「超新星」という言葉をご存じだろうか。巨大な星が終わるとき、壮大な爆発を起こすことがあるという。星が死ぬときに最後に膨大に輝く現象を超新星現象と呼ぶ。星の光が地球上に到達するまでに長い月日がかかることはご存じであろう。眩い輝きを放つ超新星現象を地球から見たとき、その爆発は何千年何万年前のもので、そこにはもうその星はない。超新星現象が始まつて初めて存在を知る星がある。失つてからその星の存在に気付いてもそこにはもうその星はない。



「超新星」を英語では「supernova」という。ロックバンド BUMP OF CHICKEN の「supernova」という曲をきっかけに、私は「超新星」のことを知った。「熱が出たりすると気付くんだ。僕には体があるってこと」という冒頭で始まるこの曲は、「失つてから気付く大切なもの」をテーマに超新星現象と人間関係を重ね合わせた歌詞になっている。「ほんまにええ曲やから聴いてみて。」と私にとつてかけがえのない人に言われて聴いてみたのだが、……その歌詞の本当の意味を理解するのは、はかなくもその大切な人を失つてからのことであつた。

温もりに甘えて言えずにいた言葉。いつでもそばにいてくれたこと。いつでも笑顔でいてくれたこと。簡単なことなのに、「ありがとう」ってなせ言えなかったのだろう。コピーライターのひすいこたろう氏の著書「あした死ぬかもよ?」という本の一部をそのまま引用させてもらう。

「目の前の子どもと一緒にいられるのは今日が最後かもしれない。旦那さんが会社に行くけど、『いつてらっしゃい』といえるのは今日が最後かもしれない。この食事が最後かもしれない。ぼくらはきつと明日もあると思つているし、来年も生きていと思つている。二〇年、三〇年、四〇年、生きていと思つている。当たり前と思つたとき、人は感謝を放棄する。本当にそれは当たり前なんやろか?奥さんがごはんを作ってくれる、お母さんがごはんやお弁当を作ってくれる。それを当たり前と決めつけたのは誰なんやろか?」

日常に当たり前のようであつた存在。自分にとつてかけがえのない大切な存在であるほどに、失つた後に放たれる超新星現象の光量は膨大だ。「当たり前前」なんてない。本当は目の前に「有」ることが「難」しい「有り難い」ことなのに、失うまでその大切さに気付かない。大切な人がそばにい

てくれる。これ以上の幸せであるのだろうか……。

人は必ず死ぬ。限られた時間の中でしか生きることができない。だからこそ、共有できた時間は愛おしく儂く尊い。生きていることは奇跡の連続だ。「いつでもできる」ことなどこの世にひとつもない。やるなら「今」しかない。やれるなら「今このとき」にしかない。

社会人になつたばかりの頃に、尊敬してやまない先生に教えていただいたことがある。「どんなときでも、生徒には心から『さよなら』と言えるようにすること。たとえそれがその子を叱つた後であつたとしても、最後は気持ちよく帰してあげなさい。」と。当時は「ご機嫌をとりなさい」ということなのかな?と浅はかな解釈しかできなかった自分が恥ずかしいのだが、あれからいろいろな経験を積めた今だから、その言葉の本当の意味を少しは理解できた気がする。昨日も今日も当たり前のように顔を合わせているこの子もあの子もいつかは会えなくなる。そのいつかは、受験を終えたその日であることが多いが、今日が最後かもしれない。明日も絶対に会える保証など本当はどこにもない。先述した「supernova」の歌詞のフレーズのように、「延べられた手を拒んだ。その時に大きな地震が起こるかもしれない」から、今日が最後のつもりで、いちばん大切な人やものをいちばん大切にしていきたい。今日が最後の「さよなら」になつてもいいように。明日会えなくなつたとしても悔いが残らないように。子どもたちを気持ちよく塾から送り出せる「さよなら」を言える人でありたい。



(櫻村)

▼▲継続希望の方へ▲▼

▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
▶在籍していた教室までご連絡ください。